

人と人が繋いだ30年

JICAの国内拠点はいくつあるか、ご存知ですか？正解は15か所！
開発途上国と日本の各地域を結ぶ架け橋として、それぞれの地域の特色を活かした国際協力を推進するとともに、国際協力を通して、その地域の発展に貢献する活動も進めています。様々な関係者との結節点として、人と人、地域と地域をつなげ、積み重ねてきた30年を“強力なJICA北陸サポーター”の皆様振り返っていただきました！

(公財)とやま国際センター
国際交流推進専門員

中村 則明 さん

国際協力と多文化共生、両方に共通するキーワードは地域づくりです。途上国や地域の課題に目を向け、そこに住む住民が共に手を携え解決の方向を探り、よりよい地域社会を目指します。以前、富山県射水市に住む外国人児童生徒の就学率を調べたことがあります。小学生で94%、中学生で82%でした。また就学していても学校に通えない子どもたちも多くなります。これは外国人児童生徒に限られません。子どもたちの教育は地域の課題です。地域社会が抱える課題を解決できる可能性が多文化共生にあると考えます。国際協力の経験者が多文化共生へ、また多文化共生の活動を経て国際協力へ進むなど国際協力と多文化共生は相互に連携できます。



多文化こどもサポートセンター

(公財)石川県国際交流協会
事業企画班長

遠藤 信広 さん

このたびJICA北陸が設立30周年を迎えられること、心よりお慶び申し上げます。私は20年ほど前に石川県庁に職務経験(中途)採用され、初めの仕事がJICAさんの担当でした。それ以来のお付き合いになります。年3回の青年海外協力隊の出発時の知事表敬や帰国表敬では、仕事とは言え、隊員の方のお話をワクワクして聞かせていただきました。また、駒ヶ根の研修所の視察や石川県内の市町に職員現職派遣制度の制定のお願いにご一緒させていただいたり、私が海外転勤になる際には送別会をしていただいたり、思い出は尽きません。これからも北陸の国際協力の活動の中心として、今後ますますご発展されることをお祈りいたします。



(公財)福井県国際交流協会
事務局長補佐

島田 しのぶ さん

JICA北陸設立30周年にあたり、(公財)福井県国際交流協会の職員を代表し、心からお喜び申し上げます。独立行政法人国際協力機構と当財団との繋がりは、機構の前身である国際協力事業団から始まり、今日まで長きに渡ります。平成12年に福井県国際交流協会館の事務所に国際協力推進員が配置されてからは、共に目指す国際交流、協力等事業の推進のため、お互い協力しながら今日まで歩んできました。「国際理解促進講座(ハローワールド)」、「ふくい国際フェスティバル」、「海外ボランティア支援事業」等長年一緒に実施してきた事業は、今も続いています。令和元年からは、SDGsを様々な世代に周知し、実施を促すため、ふくい国際フェスティバルで紹介コーナーを設けたり、当館で継続的に展示を行うほか、幼稚園で園児に楽しく紹介したりと、同じ目標に向かって活動しています。これからもお互いの持ち味を生かしながら、JICA北陸と共に事業に取り組んで参りたいと思います。最後に、JICA北陸の今後益々のご活躍とご発展を祈念いたします。

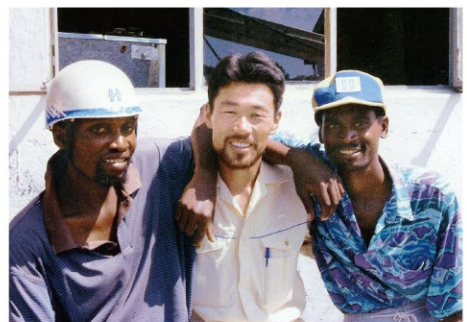


幼稚園でのSDGs講座

石川県青年海外協力隊OB会
元会長

上田 繁 さん

私はJICA北陸の創成期には、何度も事務所を訪ね職員の綾部さん達に大変お世話になり、募集説明会に参加したことが懐かしく思い出されます。そのかいあって現職派遣制度によりマラウイに行くことができました。帰国後は石川県OB会会長としてJICAに掛け替えない「仲間」がたくさんできました。現在、私は長年働いた会社を早期退職し、地方創生事業のため広島県安芸太田町にいます。中山間地域において高齢者の見守りを兼ねた配食や温泉、食事処などを帰国隊員や地元職員、障がいを持った方と運営をしております。また、事業承継として「三段峠豆腐」の製造も始めました。これらもJICA北陸が繋いだ縁だと思っています。「世界を元気にした人は日本も元気にできる」を胸に生涯協力隊として今後も活動してまいります。



小松市国際交流協会
会長

中村 知恵 さん

JICA北陸設立30周年おめでとうございます。小松市国際交流協会では「製造業のまち小松」の強みを生かし、青年研修事業の職業訓練を中心に携わらせていただいております。協会の壁には青年研修事業を行った際の写真がたくさん飾ってあります。おもてなし大好きな会員が研修員との交流を存分に楽しみ、また微力ながら国際協力の一助を担うことができた喜びと充実感でいっぱい顔をしています。実は小松市国際交流協会も来年30周年を迎えます。一朝一夕にはいかない国際協力ですが、市民レベルでできる国際協力とは何かを考えながら、次の30年もJICA北陸の皆さまと歩んでいけたらと思います。今後ともよろしくお願いたします。



福井県青年海外協力隊等を
支援する会 事務局長

福島 勤治 さん

今年にJICA北陸が設立30周年を迎えたこと、誠におめでとうございます。本会の事務局として務めてきた中で、忘れられないのは、福井デスクのメンバー達です。青年海外協力隊50周年を記念して「福井から世界へ!青年海外協力隊297人の汗と涙そして笑顔」を開催時に、司会をした早田有由美さん。このイベントをPRするためのチラシを買って出たのが萩田千津さん。記念映画「クロスロード」を県立看護専門学校に上映した際に司会した玉村香奈さん。フィジー野球道具を現地で引き渡し式をオンラインで企画してくれた竹本沙織さん。丸岡高校生とマダガスカル国際員と語る会をオンラインで積極的に企画してくれた佐藤山斗さん。感謝!



青年海外協力隊富山県OB会
元会長

大角 利雄 さん

青年海外協力隊員として、ネパールに赴任したのが、30年前。帰国して27年。この経験を通して、たくさんのJICA、JOCV関係の方々とお会いしました。そして、日本全国に掛け替えない「仲間」がたくさんできました。帰国直後、縁も所縁もない大阪で、充実した日々を送れたのも、そんな「仲間」がいたからこそです。さらに、地元、富山に戻って21年、富山県OB会活動では、JICA北陸の歴代の職員の方々にも、大変お世話になりました。私は、今年、還暦を迎え、行きつく先も見えてきたので、もっと地元へ貢献するべく、これまで学んだことを生かし、商工会などの地域活動に励んでおります。僕の「学び」は、まだまだ続きます。



氷見市 光徳寺にて

(一社)インドネシア
教育振興会(IEPF) 代表理事

窪木 靖信 さん

10年一昔と言われた時代から、最近では目まぐるしく物事が変わり数年で一昔を思わせるこの頃です。JICA北陸と草の根事業がスタートしたのが2014年1月からプロジェクト立案から考えてもまだ10年に満たないですが、この間様々なことを経験してきました。JICA北陸設立30年というのはいかに長い時間かが分かります。世の中が便利に変わってもまだ途上国では時間が止まったままの場所があります。昔も今もJICA北陸が変わらないのが途上国の人々に寄り添っていることです。



北陸中日新聞 編集局報道部
記者

前口 憲幸 さん

両膝が汚れたズボンが忘れられない。その女性保育士が担当する園児は15人。目線を合わせるから、両膝に絵の具や庭の土がつく。それを気にせず、一緒に歌い、笑う。ひざまずいたまま、泣きだした子を抱き締める。5年余り前、JICAのメディア派遣で南米パラグアイへ。小さなまちで見た国際ボランティアの光景だ。園児は現地語を話す。スペイン語は通じない。でも、彼女は言った。「精いっぱい愛情を注ぐことはできる」。青年海外協力隊の真つぐな心を知った。彼女は富山市出身。この30年間で、多くの北陸人が大志を抱き、海を渡った。国際協力は「百聞は一見にしかず」。そして「百考は一行にしかず」だ。考えるより、実際に行くことの尊さを感じる。



園児に囲まれ、笑顔みせる保育士
パラグアイで(2016年3月6日 北陸中日新聞提供)

長期研修員

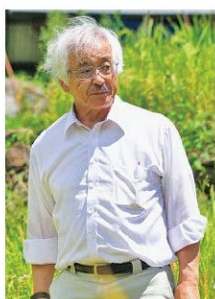
ミヒリ グナティラク Mihiri Gunathilake さん

2010年12月、私は石川県立大学の博士課程に進むことが決まり、大変嬉しかったことを覚えています。子供の頃にドラマ「おしん」を見て以来、国の美しさや強い心を持った勤勉な国民に魅了されてきました。在学中、大学の先生方やJICAスタッフがスムーズに勉強を続けられるよう、最大限のサポートをしてくださりました。勉強以外にも、日本文化から多くのことを学びました。おいしい日本食、兼六園と四季折々の白山市の景色、生け花、折り紙、和太鼓、着物、とてもきれいな公衆トイレなど、私が最も尊敬するものばかりです。最後に、他の国では絶対にできないような体験や思い出を与我えてくれたJICAスリランカとJICA北陸に心から感謝したいと思います。

石川県立自然史資料館・館長
金沢大学名誉教授

中村 浩二 さん

金沢大学と私は、能登の過疎高齢化への対応の一環として2007年から若手社会人を対象に「能登里山マスター養成事業」を実施してまいりました。若者の農業離れ都市への流出と無計画な観光開発により棚田が劣化しつつあるフィリピン・イガオにおいても「能登のような人材育成ができないか」との打診を受け、2010年頃からフィリピンの研究者、現地の大学・自治体等と調整し、JICA北陸のご支援で、「能登の里山里海」と「フィリピン・イガオ地域の棚田」という二つの世界農業遺産をつなぐ里山マスター育成事業を実現できました。2021年からは現地の自主財源により運営しており、能登とイガオをつなぐ人材育成事業が両地域を活性化しつつあります。



会宝産業株式会社
代表取締役社長

近藤 高行 さん

JICA北陸との出会いは、当社の創業者が2007年に、世界の「あとしまつ」を行うことをミッションに掲げ、国際リサイクル教育センター(IREC: International Recycling Education Center)を設立したことがきっかけです。JICA北陸の当時の課長の方と出会い、地球規模課題に向けたJICA様の理念と当社の思いが合致し、それ以来途上国の行政・大学・民間の方々を対象に100名以上の方々へ研修を提供してきました。プラシルでは、JICA中小企業支援事業を活用して現地大学に研修センターを設立、その卒業生が起業し、当社と資本提携し、リサイクル事業を展開しています。当社が地方の中小企業ながらも海外展開が進んだのは、JICA北陸様から多大なご支援を頂いたお陰であります。この度はJICA北陸設立30周年おめでとうございます。



マレーシアの環境省、交通省から研修員を招聘し、
2018年から3年間の自動車リサイクル研修を行なった。

右から2番目がミヒリさん

金沢星稷大学 准教授
(元 高校教諭)

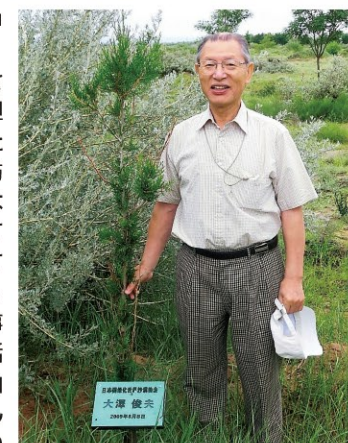
前田 昌寛 さん

JICA北陸様におかれましては、この度、30周年を迎えられるということで、心よりお祝い申し上げます。「北陸と世界」をつなぐ唯一無二の存在であり続けてきたのは、ひとえに米山芳春所長様をはじめ、開発教育に惜しみない情熱を注ぐスタッフの皆様のご協力があったからに他なりません。県高等学校国際教育研究協議会を通して、高校生のふるさと学習(Furusato Excursion)に長期研修員を派遣していただき、北陸の子どもたちの国際教育に惜しみないご協力を賜りました。また、「教師海外研修」を通して、我々教師に対しても国際教育の体験の場をいただきました。JICA北陸様のさらなるご発展を祈念し、これからも変わらぬご指導を賜りたく存じます。

NPO法人世界の砂漠を緑で包む会
会長

大澤 俊夫 さん

30周年を迎えられ心よりお祝い申し上げます。「あれ!米屋さん?」。2004年着任された内山美保子氏(当時の草の根担当)が当会(米穀店の一角を訪れたのがご縁の始まりです。事務所を訪れると支部長はじめ皆さんほっとした雰囲気、私の気持ちを汲み取って下さり、何か動いた感じを覚えております。思いもよらぬ出会いから、内モンゴルでの草の根技術支援事業が採択され、パートナー型、包括型、フォローアップ、エチオピア里山復元事業と、緊張感を持ち取り組んで参りました。こんなに懸命に取り組めば、何事も成功すると思ったものです。世界は今、混沌としています。外交、リーダーの決断、そしてJICAの役割も益々重要です。今後のご発展を祈念申し上げます。



株式会社西野工務店
代表取締役社長

久池 定光 さん

私の国際協力との関わりは、JICA中小企業支援事業で2012年からラオス国における木造建築の技術者教育からでした。技術者育成には時間を要します。一民間企業では活動の限界があり、その解決策を相談に向かったのがJICA北陸で、民間連携事業に続き、草の根技術協力事業を紹介頂き、延べ10年に渡るこの2つの事業で育ててきたラオスの若者が、今日本で実習生として活躍しています。国際協力とビジネス展開を事業の両輪とする事で持続可能性を高めることが出来ると思っています。事業当初に木造のモデル建築住宅をラオスで建築し、そのモデルハウス現場で知り合ったのが当時ラオス事務所長をされていた現JICA北陸 米山所長でした。所長とこの北陸での再会には予想外のことです。思わぬご縁を感じています。あらためてこの北陸で、ラオスの人を知ってもらいたいと思います。



実習生が加工した住宅建築現場
日本の大工棟梁と



実習生が加工した住宅建築

教師海外研修の様子、フィジー-2017年

